940 リュートゲン，クルト
オオカミに冬なし
クルト・リュートゲン作　中野重治訳

岩波書店　1964
368p　23cm　小5・6年以上

（参考）　Lütgen, Kurt : Kein Winter für Wölfe, 1955

オオカミに冬なし　定価六〇〇円

昭和三十九年十二月五日　第一刷発行©
昭和四十三年十月十五日　第二刷発行

訳　者　中野重治
発行者　東京都千代田区神田一ツ橋二ノ三
　　岩波雄二郎
印刷者　長野市中御所二ノ三〇　田中忠
発行所　東京都千代田区神田一ツ橋二ノ三
　　株式会社岩波書店

本文印刷　大日本法令印刷株式会社
製本　誠光社製本印刷株式会社
表紙・見返・箱印刷　錦印刷株式会社
別刷印刷　半七写真印刷工業株式会社

オオカミに冬なし

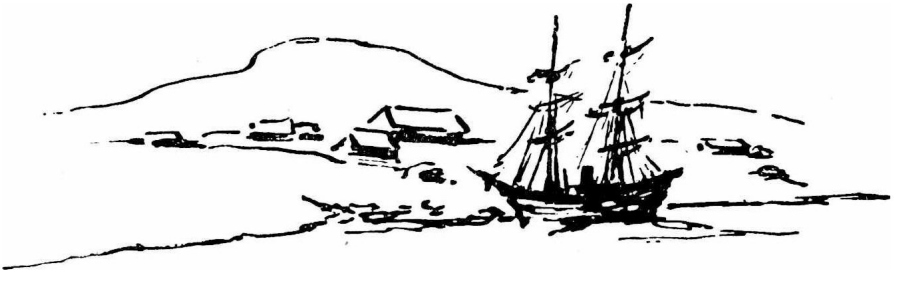
グリーンランドとアラスカとのあわい、ある不安な生活の物語

リュートゲン作
中野重治訳

岩波書店

KEIN WINTER FÜR WÖLFE
by Kurt Lütgen
1955
This book is published in Japan by arrangement
with Georg Westermann Verlag, Braunschweig
through E. Mecklenburg & Co., Tokyo.

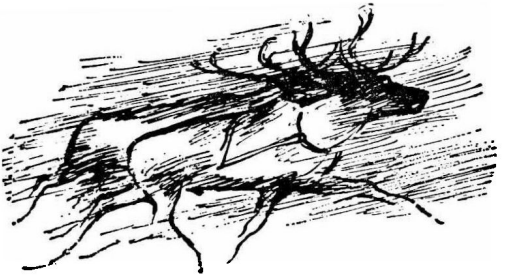
もくじ



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第一編

1 早くきすぎた冬……13
2 ワシントンからの命令……14
3 流氷へ突進……23
4 「かれらは死んではならぬのだ！」……27
5 セント・マイケル堡塁で……38
6 隊長と「彼の」トナカイ……48
7 北方さして……54
8 雪のなかの足あと……58
9 暗のなかの歌ごえ……64
10 きつい薬……68
11 「一つのことが知りたい……」……77
12 エスキモー＝ジョー……82
13 北極圏学校……84



14 チャールズ・フランシス・ホールの幸運と最後……90
15 『北極』号遠征隊の悲運……100
16 流氷とのたたかい……106
17 『かくれ家』という名の氷塊……115
18 南への漂流……125
19 デーヴィス海峡のあらし……131

第一編

1 トナカイのおとっつぁん……143
2 アルティサールク……153
3 北の風……164
4 伝道師……173
5 群……180
6 幽霊部落……189
7 大きな苦痛……203
8 夜のたたかい……209
9 一つの生命の法則……224

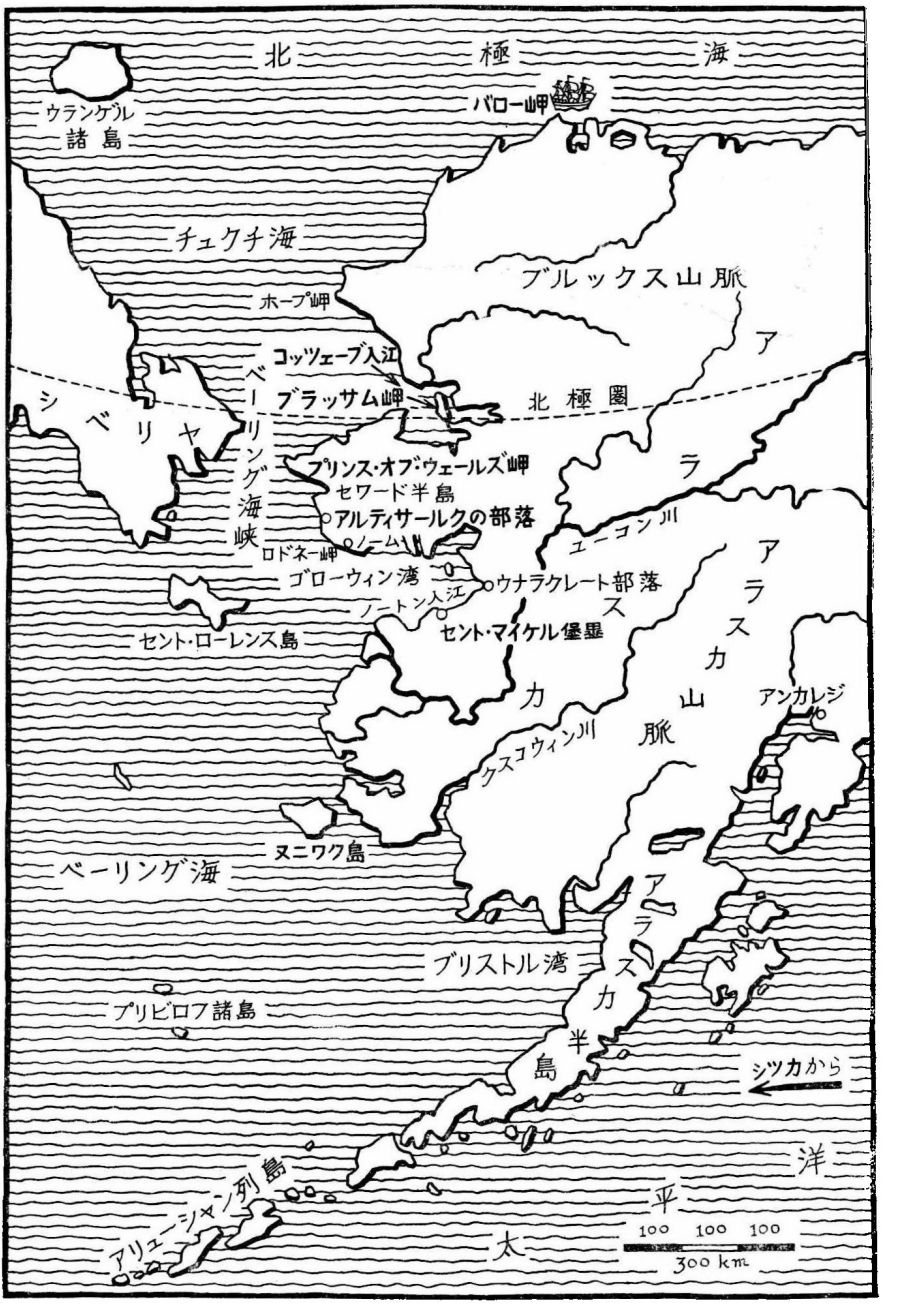
10 水の精の探検――一つの告白……230
11 「かかれ、ジャック！」……236
12 エッカズレー卿……244
13 ラブラドルさして出発……251
14 「そっちのごろつき、こっちのごろつき……」……258
15 雲の柱……271
16 水の精のすみか……276
17 「命の火花が一すじでもちらついてるかぎり……」……285
18 送りオオカミ……291

第三編

1 はやて……309
2 一本のマッチ……312
3 ニューヨークからの使者……315
4 残酷な荒地……321
5 「ここでわたしが必要なのだ……」……329
6 犬たちとの別れ……334

7 クマの恐怖……338
8 ブラッサム岬で待つ……342
9 襲撃……347
10 氷のなかの灰色の塚……354
11 トナカイ来る……360
訳者のことば……367

さし絵 K・J・ブリッシュ
写真 渡部雄吉


北極海
ウランゲル諸島
バロー岬
チュクチ海
ブルックス山脈
ホープ岬
コッツェーブ入江
ブラッサム岬
北極圏
シベリヤ
ベーリング海峡
プリンス・オブ・ウェールズ岬
セワード半島
アルティサールクの部落
ロドネー岬
ノーム
ユーコン川
アラスカ
ゴローウィン湾
ウナラクレート部落
ノートン入江
セント・ローレンス島
セント・マイケル堡塁
アラスカ山脈
アンカレジ
クスコウィン川
ヌニワク島
ベーリング海
アラスカ半島
ブリストル湾
プリビロフ諸島
シツカから
アリューシャン列島
太平洋
100 100 100
300 km

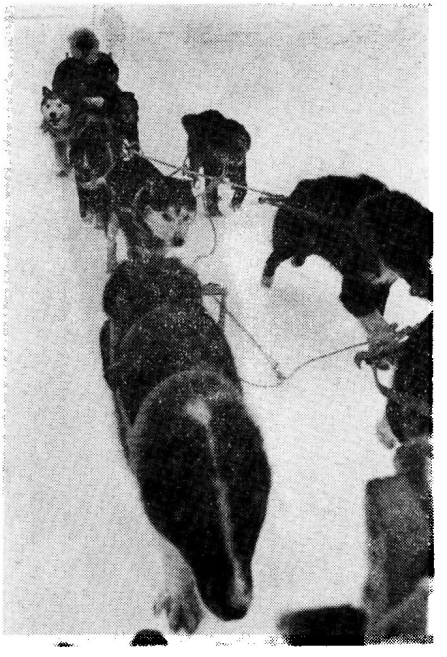
オオカミに冬なし

グリーンランドとアラスカとのあわい、ある不安な生活の物語

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

この本に書いてある
いろんな人間、いろんな出来ごとは、
つくりものではありません。
一八六七年から六八年にかけては、ラブラドルで、
一八七一年から七三年にかけては、グリーンランドとデーヴィス海峡とで、
一八九三年から九四年にかけては、アラスカで、
ほんとにあったことの報告によって書いたものです。

第一編



犬ぞり

1　早くきすぎた冬

その年は、冬のきかたが早すぎた。いつもなら、あらしと大雨との前ぶれがあり、最初の凍てがあってから、ひと足ひと足と北からおしよせてくる冬が、だしぬけに、早くも九月の第一週に、いっぺんに、ありったけの力で全アラスカに落ちかかったのだった。

ある、夏らしくあったかな、風のない一日が暮れたその夜、ふいに、氷のような北風のあらしが、陸地一帯を吹いてまわったのがはじまりだった。もえあがる極光にてらされて、あらしは四、五時間のうちに颶風になり、それが、液状ガラスのように、びっちりと詰まってすきとおった寒波を、山といわず野といわずおし流した。寒暖計は、北極圏の南がわでさえ、夏のしまいごろの温度から、またたくまに零下二十度に落ちた。生きものという生きものが、この無慈悲な寒気の来襲で、かちかちにかじかんだ。そして、その場で息の根をとめられなかったものも、二日してあらしがおさまったときには、すっかりなえしぼんでいた。

そしてそれから雪がきた。たえず北から吹いてくる風が、極の空から、暗い雲のかたまりをかぎりなく引きよせてきて、それを山にうちあてて引きさくと、そのふくれあがった腹から、とほうもなく大きな雪の荷物を凍てついた大地にぶちまけた。何日ものあいだ、北極海の岸のバロー岬から、ずっとさがったアラスカ南岸のアンカレジへまでかけて、いちばんの高い峰も、いちばんの奥まった谷も、白い闇にとざされた。

その闇がうすれていって、晴れあがった空の下で、あらためてきびしい寒さがきたときに、アラスカは「こ

れは……」と思ったのだった。これは、こんどは、最初の、まもなく通っていってしまう冬の手はじめといったものとは話がちがうらしいぞ。そんなところではなくって、今年は、冬がいつもより早くきて、このまんま、べったりと、つづけざまにすわりこんでしまうつもりらしいぞ。この予感で、冬になれたさすがの移住者たちも、ふるえあがったのだった。

「このへんの、わたしたちのとこでさえ、こう早く、こんなにひどい寒さで大雪がきたんじゃァ、いったい内陸のほうじゃ、ユーコン川のほうだの、わけてもずっと北のほう、北極海岸のほうなんかじゃァ、どんなあんばいだろう……」

アラスカ南岸の人びとは、こう考えて心配した。だれにしろこの人たちは、ベーリング海沿岸のエスキモーの村々が、まして、内陸奥地の木こりや毛皮とり、それから北極海のクジラとりやアザラシとりたちが、こんなに早くってものすごい冬がこようとは、けっして覚悟していないこと、冬の用意なんぞは、まったくしていないことをよくく知っていた。

2　ワシントンからの命令

政府のカッター『牡グマ』号の船長室、そのあったかい、タバコのあおい煙でいっぱいになったなかで、ふたりの男が、だまって将棋盤の上にかがみこんでいた。と、船長室の階段をかたかたとならして、いそぎ足でおりてきたものがあって、みじかく、力をこめてたたいたかと思うと、いきなりぱっと戸があいて、ひ

とりの見しらぬ人間がつかつかとはいってきた。で、ふたりは不服顔に目をあげた。はいってきた男は、煙のなかでほんのちょっとまばたきしたが、ふたりの男へ、しらべるような目をやってから、ふたりともそろって腕まくりのシャツ姿ではいたものの、一方よりは、いくらかよけい船乗りらしく見えるもう一方のほうへ、ことばをかけようと心をきめた。

「バクスター知事のところからきました。」と、彼はぶっきらぼうにいった。「そしてこれを、タトル船長、あなたにここでお渡ししろといわれてきました。」

そういって彼は、テーブルごしに黒い革袋をさしだしたが、さしだしながらも、腕まくりのふたりの男のうち、どっちが船長か、うまくあてたなと思って内心満足した。

船長は、ふきげんなうなり声を一つ出して袋をうけとり、じぶんのわきへ、テーブルの上にそれをおいたが、すぐまた勝負にもどるつもりでいたらしいところを、つかいの男が、いっこうもどっていこうとしないのに気づいて、気をわるくした。船長は、ひたいにしわをよせてつかいの顔をみてつぶやいた。

「ほかに、何か、まだ？」

つかいはちょっとほほ笑んだ。

「船長、知事はあなたに、今すぐ袋の中身をごらんねがいたいのです。そして、必要な措置を講じておいて、そのままっすぐ、知事のところへきていただきたいのです。それから……」

「なんだって？」

「どうぞ船長、とにかくお読みください。」つかいは鄭重につづけた。「ほかにも申さねばならぬことは、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com